

サイエントロジー： 精神的 自己認識への道

ミハイル A. シベルトセフ博士
新興宗教組織協力委員会、議長
ロシア大統領事務局

1955年7月

サイエントロジー： 精神的 自己認識への道

サイエントロジー：
精神的
自己認識への道

目次

前書き	1
I. 神学体系としてのサイエントロジー	5
I.I. 教祖的指導者	5
I.II. サイエントロジー：宗教教義と聖なる知識	7
II. 聖なる知識の維持の問題	8
II.I. 深遠な知識とサイエントロジーの技術	8
II.II. 最高レベルの自覚へと達成するための 技術、知識への手ほどの手順 自己認識のレベル：プリ・クリアーから 最高レベルの精神的存在へ	10
II.III. サイエントロジー神学体系の中核および基礎としての 「完全なる自由へのブリッジ」	11
III. サイエントロジー教会の精神的メッセージ	12
III.I. 人間の墮落、自覚の墮落 (大惨事)、 自己変貌：英雄の私的な旅路	12
III.II. 告白、自己理解、救済：宗教サービスへの道	13
IV. 絶対者の理解：新しい存在、または至高の存在の構造	14
IV.I. 個人的あるいは非個人的存在	14
IV.II. 物質宇宙 (MEST) と精神的存在間の 行動の連続性あるいは非連続性	14
IV.III. サイエントロジーにおける黙示録の問題	15
IV.IV. 口頭および非口頭による絶対者への理解	15

前書き

サイエントロジー教会の宗教的メッセージや実践は、精神的メッセージを知覚することが非常に困難な時期に到来し、人類にそれを教えました。人の主観的現実が、いかなる精神的メッセージからも妨げられ得る重要な根拠は数多くあります。

その内のほんのいくつかを次に挙げます：

1. 一般大衆意識の世俗化。
2. 伝統的な宗教制度や教義、実践が現代人の多数にとっては平凡である。
3. 従来教会の分裂が不信や失望を一般信者にもたらし、彼らを従来型の構造ではない、原点へと立ち返らせることになった。
4. 自己の精神的基盤に関する感情的体験の喪失、および一時的な価値に基づいた偽りの自己認識、つまり、精神的な自己認識の喪失は、現在の人生を超えた、より広範な精神的情况における自己を見つめる能力の喪失である。

人に自身の精神的本質を忘れさせてしまう根源である数多くの社会的、政治的、社会生態学的、および文化的な危機によって状況は悪化しています。精神的存在としての自己の認識を失った人は、外的な惨事や災害、衝撃という結果を生みます。つまり、その

人は自分の精神的自覚を失い、自身を偽りの価値観に基づいて自覚するのです。この偽りの自己認識があまりにも深まると、精神的存在としての真の自己認識や自己意識を再発見することは、精神的自己認識の再生へとつながる、特別な長い道のりを踏破する必要に駆られます。精神的な自己認識へ立ち返る道は、常に従来の宗教体系を通してはありません。それとは反対に、多くの人々は従来の宗教体系外部の道を探求しており、また、従来の宗教体系が、現代における挑戦に対して適切な回答を持たないことが明白であれば、その外部で精神的復活や再生への道を追求する権利は確かに彼らにあります。

サイエントロジーはその宗教的实践とメッセージを通して、その回答と精神的復活への道を提供します。サイエントロジー教会は非宗教的な時代に形成された観点を持つ人々に対応しており、精神的な自己意識を復活させる明白な目的を持って、この特定の時代によって生み出された慣習や傾向を用います。サイエントロジー教会は、現代社会の宗教および告白の多様性を考慮に入れています。したがって、サイエントロジー教会のメッセージはすべての宗教団体に向けられており、他宗教の信奉者がサイエントロジーを実践したり、サイエントロジー教会に属する人たちが他宗教を信奉することを可能にしています。

サイエントロジー教会の伝道事業は、元全体主義諸国にとって特別な重要性を持っています。現代社会における精神的再生に対する上記の障害のすべてが、元全体主義諸国では加増されているからです。民主主義の発展した国々では見られない極めて重要な任務、つまり、全体主義体制の期間に完全に破壊された市民社会施設を再建設することがその障害のひとつとして加えられます。ここで意味するものは地域社会施設や地方自治の立て直し、また住民に地域社会を建設する技能を身に付けさせる必要性です。そしてそこでこそ、サイエントロジー教会による地域社会の建設における経験や、精神的トレーニングの技術によって、新たな精神的基盤を築く上での重要な役割を果たすことが可能であり、またすでに、全体主義体制以外の場所ではそれが果たされています。

元全体主義体制の地域では、異民族間の対立や政治的対立が絶えず国際的また異宗教間の問題へと発展していく恐れがあることで、その状況は悪化してきています。したがって、異宗教間での事業に成功を収めているサイエントロジー教会の経験は、新興国家や領域にとっては緊急の課題です。

サイエントロジーは自分自身の能力における真の精神的本質を探究しようとする人に呼びかけます。サイエントロジーは明白な保証と、その保証を充足するための基準を示します。それは自分自身とその能力のみしか信頼せず、同時に精神的領域における個人の主権や独立性についての精神的基盤や正当化を追求する人々にとっては特に重要です。そういった人々は

現代ロシアの社会階層や職業階層のすべてにおいて多く存在しています。自立した思考を持ち、行動的で不信感の強い全体主義体制時代後の人々にとって、サイエントロジーのイメージを魅力あるものになっている本質的、宗教的あるいは精神的本質の根拠は何なのでしょう。この問いに答えるには教義としての、また教会組織としてのサイエントロジーの基本的な特徴のいくつかを、そして従来教会では答えが得られなかった人々たちにとってのサイエントロジーの価値を理解する必要があります。

次のこれらの問いに答えることは特に必要です。神学体系としてはサイエントロジーは何であるか？サイエントロジーはどのようにして神聖なる知識を維持するのかという問題に取り組んでいるのか？サイエントロジーの精神的なメッセージの構造はどのようなものであるか？サイエントロジーにおける新しい存在の構造、および絶対者である神についての理解はどのようなものであるか？

これらの問いに対する予備的な答えの中で、ロシアや元全体主義諸国内でサイエントロジーが迅速に成功した理由を明らかにしようと試みます。

サイエントロジー： 精神的 自己認識への道

ミハイル A. シベルトセフ博士
新興宗教組織協力委員会、議長
ロシア大統領事務局

I. 神学体系としてのサイエントロジー

私の行った数多くの討議やインタビューから明らかなように、サイエントロジー教会員のすべてがサイエントロジーに特別な神学体系が存在するとは信じているわけではありませんが、神学体系の存在を示す基本的な正規の特質が少なくともふたつあります。まず第一に、教会設立における教祖的リーダーの役割です。そして第二に、十分に開発された宗教教義および心の内部と外部の要素を持つ神に関する知識の存在です。

I.I. 教祖的指導者

創設者 L. ロン ハバードの著作がサイエントロジーの教義と組織の基盤です。ハバードの著作は常に使用され、絶え間なく学ぶべき権威あるテキストです。教会自身の内部的決断によって、ハバードのテキストは教典、つまり聖書の役割を担っています。したがって、教祖的指導者は主要テキストの著者です。ハバードを教祖的指導者として見る第二の理由は、彼が真の精神的認識への道を見つけ、その道を歩んだ最初の人物だと教会員が信じていることです。その道への遠近を問わず、ハバードの道に従うには、ハバードの経験を再体験すればいいだけです。そしてそれは誰にでも可能です。

宗教運動の教祖的創設者とその信奉者たちとの基本的な違いを強調することは重要です。ハバードの場合、その道は彼自身の教祖的指導力によって開かれました。信奉者たちの場合、教典指導による徹底した学習が必要です。

教典の目的は、精神的認識を得ること、そして自覚を変えることにあります。新たなレベルの自覚へと到達する過程はハバードにより、その詳細が著述かつ規制されていること

は強調されるべきでしょう。詳細な規制や過程の認可は、宗派の分裂を防ぐための重要な方法だと強調することは大事だといえます。認可されたテキストを新解釈する可能性への扉は極めて単純ですが効果的な方法によって閉ざされています。完全な真実はハバードの個人的な経験により発見されたとされています。そしてこの個人的な経験が、真の精神的認識を達成する技術に結び付いています。ハバードによる一回きりの、独自の体験（形式の役割を果たす）とは異なり、他の人々による体験は個人の自己認識のレベルを変えていくための技術です。ハバードによる体験（技術という意味で）の内容は、普遍的かつ繰り返し行うことが可能な本質を持っています。サイエントロジー教会の伝道目的は、精神的認識を達成する必要性を感じている各個人に、ハバードによって開かれた道をたどる機会を与えることです。

サイエントロジー運動の教祖的指導者を宗教指導者として見なす根拠となるその主な特徴は何でしょうか？

まず最初に、運動の創設者はあらゆる人々に関わる精神の本質、精神的知識を発見しました。

第二に、この知識を基に創設者は個々人を救済する方法を開発しました。

第三に、リーダーに与えられた知識は完璧なもので、どんな追加事項をも不可能にしています。いかなる追加事項であれ、それは知識を歪め、有害なものに変えてしまうだけです。これにより、創設者の指示が従われていることを確実にするための特別な監督の必要性が出てきます。

第四に、創設者の個人的経験と彼の個性がテキストやビデオ録画の中で近接して見られることです。そしてそれらは信奉者の内面世界や自己認識を一変させ、精神的および不滅の源としての自己への揺るぎない悟りを生みます。

第五に、運動の創設者は他の人が取って代わることはできません。これこそ、サイエントロジー教会員が極めて高度な精神的達成をしても、教義の新しい異説を仮定する創設者の地位には上れない所以です。したがって、誰も創設者の権威と権力を奪い取ることを主張することはできません。

第六に、創設者により著述された精神的書信を基礎に宗教的秩序が確立されており、教会員の階級は男女を問わず、個人の精神的達成、およびその秩序内で永続して精神的、神的実践を行うことのみに依存します。

第七に、サイエントロジー教会のサービスは創設者著述のテキストと、教会や創設者の著作によって、その人生が向上した教会員たちの証言から成り立っています。

したがって、運動の教祖的指導者は、信奉者にとって救済者として現れ、完全な自己とその精神的認識を与えてくれます。言い換えれば、サイエントロジーの創設者は宗教教義と宗教運動の創設者です。

I.II. サイエントロジー：宗教教義と聖なる知識

サイエントロジーの基本的論題のいくつかを検討すると、サイエントロジーの教義は宗教であると思えます。まず最初に、精神的かつ永遠の本質は、それによって個人が自分自身を認識すべき概念です。

次の論題は人にその真の本質を忘れさせてしまう歴史または単一の出来事（大惨事）、つまり、自然の力によるか、あるいは計画的な悪の力によってなされた真に不滅の自己に対する奴隷制の論題です。そしてこれは宗教教義においては伝統的なものです。

物質、エネルギー、空間、時間は、強力かつ不滅の自己によって創造されましたが、その自己はその全能性への自覚を失い、自身の創作物に支配される羽目になっています。

自己の忘却は、その不滅の自己による活動と創造性の結果であると示唆する証言もいくつかあります。また、人の住む宇宙の主要地域に大惨事を引き起こした個人的な悪意の結果とする証言（より曖昧な）もあります。

悪意の欠如または邪悪な創造主の存在のいずれにせよ、宗教的存在論の伝統的論題がそこに見られます。つまり個人の墮落とその元の精神的能力の忘却、また大惨事そのものに対する忘却の論題です。

自分自身の無限の過去についての知識、数多くの以前の存在としての自分に起こった出来事は単なる知識ではありません。それは聖なる知識です。人に宇宙における自身の真の場所を理解させ、数々の以前の惨事から宇宙規模の主要な大惨事に至るまでを理解しようとする過程で、自己についての真の知識をよみがえらせます。したがって、長期にわたるサイエントロジーの学習を通して獲得した知識や、自分自身の歴史に関する自覚は救済をもたらす解放的な知識です。

聖なる知識はその知識を得た人を改め、一変させます。自分自身についての偽りの知識、つまり偽の自己認識という形での障害となっている**エングラム**を破壊した後に個人の真の認識の達成が得られます。真に不滅の自己を理解するために、個人の内面に存在する障害を破壊することは、**オーディター**の助けを借りて達成されます。オーディターとは聴く人であり（ラテン語の**アウディア**、「聴く」から派生）、同時に聖職者および聖なる知識への道を守る人です。**オーディティング**における問い掛けと答えのテクニックは、聖なる知識を得るための手順のひとつを想起させます。そこでは門下生（または真実の探求者）は真の自覚への出発点までのみ引き上げられることが特徴的な慣習です。自覚そのものと、物事の真の本質への理解は探究者自らが見つけなければなりません。（真の自己を理解する上での似たようなテクニックとしては、スペイン、ロヨラの聖イグナティウスによる論文「精神的修行」や、東洋の宗教学派、禅宗の修行である公案、そしてユダヤ教ハシディックが挙げられます。）

並行して挙げられた上記は、精神的経験の世界的な宝庫に向けられた、サイエントロジーの貢献の独自性を貶めることなく、サイエントロジーの宗教基盤、および宗教運動としてだけでなく宗教秩序としてのサイエントロジーの精神的な可能性を確信する助けとなります。後者は特に重要です。というのも、秩序の出現は、組織的な問題や宗教または教育上での問題を解決する必要性の結果ということも考えられるからです。組織的問題を解決するためにのみ存在する宗教的秩序は、宗教運動における歴史が示すように、短命です。それに対し、よく開発された精神的教育技術を基にして形成される秩序は、長続きすることが判明しています。イエズス会の秩序が一例として挙げられます。それは、その秩序の創始者であるロヨラの聖イグナティウスによる論文「精神的修行」によってもたらされました。数多くの実践的な問題を解決するための秩序の力は、精神的および宗教的な実践の結果によるものです。イエズス会の秩序が安定しているのは、「精神的修行」の技術を正しく遵守しているからです。同様に、真の自己を見つけるための特別な精神的技術によって、サイエントロジー教会の秩序の中心も安定しています。そしてその技術はこの宗教の教義および聖なる知識の中核を成しています。したがって、聖なる知識を維持することについての問題は、サイエントロジー教会にとっては主要な側面となります。

II. 聖なる知識の維持の問題

II.1. 深遠な知識とサイエントロジーの技術

宗教体系における深遠な知識は、ふたつの形態に分けることができます。第一の形態は、特別な方法および隠ぺいの字母体系、つまり暗号化です。隠ぺいされた知識がそれを求める人たちすべてに公開されることは、その知識を冒瀆し、世俗的なものへと一変させ、その聖なる力と人を変えうる力を失うと考えられています。

第二の形態では、深遠な知識が開放的で身近であることを原則にしています。しかし、その知識構造の独自性により、門下生が前段階を習得しなかった場合、次段階を理解することはできません。つまり、深遠な知識は、一連の詳細な個人的達成の全段階をまず通過しなければならない、という状況から生じています。各段階はそれ自体の中に他段階すべてのミニチュア版が包含されています。したがって、深遠な知識は、知識を暗号化したり、隠ぺいしたりするために発達したのではなく、最高レベルの知識の保持者は、たとえ自身がそれを望んでも、内面意識や自覚の変化におけるすべての必要段階を通過していない人には、その知識を伝えることができないという単純な状況から生じています。最高レベルの知識の保持者ができる唯一のことは、門下生に必要な段階のすべてを通過させることです。

サイエントロジーの深遠な知識は後者のタイプです。サイエントロジーの知識の段階上では「機密」と記されているものがいくつかありますが、これはそれ以前の段階をすべて通過した人にのみ、その知識が伝えられるということです。

サイエントロジーは本質的に開放的な宗教体系です。サイエントロジーの道と精神的メッセージを受け入れることへの内面的な必要性を感じる人は皆、それに対する配慮や支援を得ることが期待できます。そして個人の精神的認識の追求に対する返答として、真実の探究者との作業が行われます。しかし、サイエントロジーの精神性の中核にあるものは何よりもまず、精神的認識、新しい精神的な無限の自己認識における、その人自身の個人的な体験だということを頭に入れておく必要があります。したがって、この体験についての「物語」や「ナレーション」では、そのほんのわずかを表現できるのみです。精神的指導者が、その体験を隠すわけではありませんが、この体験の本質が言葉で表現したり、伝えたりできるものではないからです。サイエントロジーでは確かに、永遠の自己認識のように高レベルに到達した個人が体験した道と変貌についての「証言」のジャンルがあります。しかし、それはまさに言葉通り「証言」（非常に重要、かつ必要なジャンル）であり、聖なる知識ではありません。これらの証言を読んだり、聴いたりすると証言する人たちは、得た知識を分かち合うために、自らの体験を懸命に表現しようとしているのです。にもかかわらず、それが不可能であることが明白になります。

故に、サイエントロジーの技術を正確に維持し、再生する必要性、および前段階の教材を習得するまでは次段階へは進めないという、常に言われている必要性は隅々にまで行きわたっています。これについて、個々の単語の意味を明確にする手順に大きな注意が払われています。言葉の意味を明確にする手順にこれほどの注意が払われることはまた、サイエントロジーを偉大な宗教伝統に関連付け、サイエントロジーの知識を神聖なものに見なすことにつながっています。

言葉の意味を明確にし、聖なる知識を得る手順は、サイエントロジーの主要目的の一部です。それは永遠なる自己の真の精神性を認識し、理解を明瞭にします。

II.II. 最高レベルの自覚へと達成するための技術、 知識への手ほどきの手順

自己認識のレベル: プリ・クリアーから最高レベルの精神的存在へ

一定不変の意識の明瞭さと自覚の必要性 (白昼夢のような日課を振り落とす)、そして正規の合理性、つまり低い段階を明確に理解することなく、真の自己を認識する高い段階へと進むことはできないという構造は、まず知識に階級制度をもたらし、次に知識への手ほどきの手順をもたらしします。自覚の変化が生徒に求められている宗教教育の文化の中で、この新しい自覚の継承が不可能な場合、宗教教育の文化内では手ほどきの手順が絶対に必要となります。ここからまた、サイエントロジーの神聖なる文化の重要な特徴が生まれています。つまり、サイエントロジー教会の教典であるハバード著のテキストが、生徒の自覚を変貌させるための手段であるということです。それはハバード著のテキストにおける公理的要素を特徴づける特別な側面です。これらは伝統的な短編テキストで、生徒による長い内省を呼び起こすことを目的にし、それにより生徒の内面的自己への理解に変化が起きます。つまり、経典 (ハバード著のテキスト) の理解を繰り返し試みることによって、自分自身、そして真の自己のより深い理解を得るのです。サイエントロジーは熟考の実践をグループ、一対、また単一 (ソロ) で行う機会を提供します。この実践はまた、サイエントロジーを他宗教と関連付けさせるものです。すなわち、秩序立った構造、聖なるテキストを通して熟考することは新しい情報を得ることではなく、自己の変化を経験すること (教会員にとって)、あるいは自己の浄化を経験すること (指導者にとって) であり、大きな努力の結果、それにより自己意識の明瞭さを取り戻します。

したがって、知識と自覚は伝達することができないと言う時、それは生徒がこの知識 (自分自身を発見する) を得ることを手助けするための手順が必要だということです。それは聖なる知識のある段階から別の段階に移行する、正規に開発された制度が必要であることを意味します。

教師 (あるいは、いくつかの段階においては独立して) の助けを借りて、生徒はプリ・クリアー (サイエントロジーのプロセッシングや精神的カウンセリングを通じて、自分自身と人生についてより深く知ろうとしている人) であることから始めて、最高レベルである、機能しているセイトンまでのすべての段階を通過します。

上記のサイエントロジー固有の深遠な知識の特徴を考慮すると (特に階層制度、厳格さ、段階を飛び越すことが不可能であること)、サイエントロジーは、精神的な道筋におけるかなり目覚ましいシステムを開発しました。そしてそれはまた、安定さと精神文化を保証します。

II.III. サイエントロジー神学体系の中核 および基礎としての「完全なる自由へのブリッジ」

宗教運動は、たとえそれが組織的な教会の段階へと到達しても、教義の詳細な体系を必ずしも持っているとは限りません。教義体系の存在は宗教運動が成熟したことを示し、その結果、かなり長期間にわたって形成されます。しかしながらサイエントロジーは、宗教運動の歴史においてすでに観察されているように、非常に迅速にその信条や精神的トレーニングの制度を形成しました。精神的および組織的な成熟が早く達成された理由は、よく開発され、形式化された精神的変貌と精神的自己認識の詳細な段階制度です。この制度は、特定の伝統的な教会を浄化し救済した、多くの教団の主要関心事であった数々の精神的な啓発と浄化の制度に比するところはありません。

神学体系は2種類に分けることができます。**カタファティック**および**アポファティック**です。

カタファティックは、最高レベルの宗教体験を言葉で表現することの可能性 (または能力) を仮定する制度です。アポファティックは、最高レベルの知識および価値観は表現することが不可能だとします。ですから、カタファティック制度では、神のような存在や目に見える、または見えない世界における敬虔 (けいけん) な構造について詳細かつ広範に説明します。アポファティック制度では至高の存在については何の説明もしません。この制度の視点からはそれが不可能だからです。しかし、アポファティック教理は最高レベルの知識へと昇っていく制度で、教師による正式な指導の遂行によって達成されます。

確かにサイエントロジーには両方の神学体系が含まれていますが、アポファティック教理が大きくその地位を占めています。したがって、サイエントロジーは自己の新しい状態の説明によってではなく、より高い状態へと到達するための方法の説明によって特徴づけられます。

「完全なる自由へのブリッジ」は精神的変貌の道筋の隠喩です。この道は大半の宗教文化や神学体系に存在します。しかし、それは本来、神学体系の中核に置かれた秩序、つまり、階級制度に組織された自覚の状態の、正式な順序を示す精神的な浄化の道筋です。

厳密に言えば、この階級制度、「完全なる自由へのブリッジ」は、サイエントロジー教会が世界に、および信奉者に向けて発信するメッセージです。

このメッセージの内容はブリッジの構造を形成する根本的な論題です。すべての主要神学的概念（絶対者、人の状態、救済の概念について）や、聖職者の使命、そしてサイエントロジー教会の組織的構造は、個人的な変貌および個人の普遍的役割に対する理解への道として把握される、ブリッジの構造に基づいています。

III. サイエントロジー教会の精神的メッセージ

精神的メッセージの構造は論題が複合されて成り立っています。精神的メッセージは各個人に向けられ、正規に段階が記された道筋、いわゆるブリッジの各段階では、精神的メッセージの論題の新しい奥行きと完璧さが見つけられます。

宗教教団員による実践は、特別な精神的メッセージの個人的論題について深く熟考することを前提とします。キリスト教では、イエス・キリストの人生における主要な出来事について深く瞑想する実践を行う教団もいくつかあります。別々の論題や、キリストの情熱のエピソードについての瞑想の目的は、瞑想者の内面的変貌や浄化、および自らをキリストの手中に預けることにあります。スフィ教団の中にはこれと類似した個人的な実践が存在します。多くの宗教文化から似たような例を挙げることができます。内面的浄化や変貌への道を可能にしている共通の条件は、精神的メッセージにおける特別な論題構造です。

サイエントロジーの精神的メッセージの特徴である論題の内、ふたつを選び出すことができます。

III.I. 人間の墮落、自覚の墮落（大惨事）、 自己変貌：英雄の私的な旅路

人間の墮落は、個人が、自身の強力で永遠の真の自己を忘れさせてしまった普遍的な大惨事と見なされています。空間と時間を創造した計り知れないほど強力な自己が、自分自身の創造物に依存するに至るほどに下落しました。多様な論題を持つサイエントロジーの精神的メッセージの中核は、「自身の創造物によって奴隷化され、自身の自由を失った創造主」です。この敗北に対する認識は、同時に解放への最初の一步です。ここから、何百万年にもわたって起きたすべての大惨事に対する認識への必要性がでてきます。何百万年にわたって個人が存在してきたことを理解する必要性は特有のものです。

墮落、認識、解放の論題についての第二の特徴は、サイエントロジーのメッセージにおける超人的なイメージです。超人的な論題が意味するところとは、新しい強力かつ永遠の自己への追求は、まず個人が道筋に従う、つまり、ブリッジをわたるその努力の結果だということです。もともと、そして根本的に、人間は基本的に善であるというのは、サイエントロジーの信条の基本的な原則のひとつです。比較対照のためにここで強調されるべきことは、この明白に表現されたサイエントロジーの見解は、キリスト教のメッセージとは真っ向から対立することです。キリスト教では人間の性質における元からの損傷や罪深さや、人間の努力によってそれが矯正されることは不可能であると主張します。(その決まり文句は、「豹がその毛皮の斑点を変えることができないように、たわんだ木が真っすぐになることはない、故に、個人が原罪や墮落した性質を私的な努力によって改めることは不可能である」です。) 人間を超人と見なすこと、つまり、人間は本来、善であり、自身の努力や教師からの援助と特別な実践によって本来の能力を取り戻すという信条は異教である、とキリスト教では常に見なしてきました。キリスト教のメッセージとサイエントロジーのそれとの間の違いについての詳細な議論に関わることなく言えば、この明確な相違が、キリスト教文化が一般的となっている地域でのサイエントロジーの普及の困難さの原因のひとつであることは注目すべきでしょう。

しかし、分析のために言うと、以下を強調するには比較が重要です — 墮落、墮落に対する認識、そして解放は、個人の完全なる自由へと到達するためにブリッジをわたる超人の私的な旅路と見なされていること。長期間の実践は何百万年もの長期にわたる個人の存在に対する認識 (そして個人の自己の想起) や、超人の私的な道筋 (旅) へとつながり、それは、キリスト教のメッセージで提供される私的な旅や自己認識とは相反します。サイエントロジーのメッセージの論題は、宗教サービスの際に実現されます。そして、宗教サービス自体にもまた論題構造があります。

III.II. 告白、自己理解、救済：宗教サービスへの道

いずれの強大な宗教文化や宗教教団でそうであるように、サイエントロジーでもまた、説教は宗教サービスの重要な一要素となっています。しかし、サイエントロジーでは、多くの伝統的な宗教の特徴であるところの改宗制度は見当たりません。逆に、サイエントロジーはその信奉者に他宗教を同時に実践することを認める数少ない宗教のひとつです。とはいえ、サイエントロジーは完全な宗教であり、その教会員たちは、他宗教は眼中に置かずにサイエントロジーを実践しています。他宗教の教会員としての地位を保つ人たちもありますが、それは主に家族のためであったり、社会的または文化的な理由からです。私的経験の理性的な側面を継続的に強調し、告白 (個人の私的経験に関する証言) で外部の世界を扱う時、それがサイエントロジーのサービスの特徴となる理由です。

告白の合理性は、自己理解に至る技術が細かに開発され、さらに重要なこととして、それが実践されていることを示唆しています。つまり、数百万年継続して、ある宿命を持つ個人として私的体験のある自分を理解すること、また自分を永遠の全能として理解することです。

告白と自己理解は救済をもたらします。救済は自己の真の性質に対する着実な認識や、全知全能で永遠の自己であることへの正しい認識を妨げる内面的な障害 (エングラム) のすべてを取り除くことです。つまり、救済は個人の精神的な自己認識に気づき、それを見つけることです。

あらゆる宗教文化における精神的メッセージの構造は、絶対者 (Absolute) を理解することによってのみ正しく把握されるようになっていきます。これにより、サイエントロジーの特徴である絶対者の観念を再考するに至ります。

IV. 絶対者の理解: 新しい存在、または至高の存在の構造

絶対者を理解することは多くの神学体系の中核です。この主題について論議するためには、著述だけではなく、口頭の証言にも頼らなければなりません。

絶対者に対するサイエントロジーの概念を検討する上で、他の神学体系における絶対者についての確固とした概念と比較してみます。

IV.I. 個人的あるいは非個人的存在

より高い存在あるいは絶対者は、非個人的な存在です。それは個人的な精神的存在の状態であるとともに、全知全能の自己が行う創造的ゲームの結果として出現する創造物の存在状態です。

IV.II. 物質宇宙 (MEST) と精神的存在間の行動の連続性あるいは非連続性

この問題は一般的な型式では取り上げられず、精神的実践においては何の関わりもありませんが、創造者と創造された世界 (物質、エネルギー、空間、時間によって構成され、MEST という頭文字を形成する) の間での関係が妨害されたということが大いにあると言えます。つまり両者間では徐々に継続した変遷が行われなかったということです。絶対者に関して言えば (この抽象的なものは現実的な角度から見ると、ある程度は興味のあることです)、それは宇宙遍在の本質であり、精神的存在によって達成することができます。そしてそれは完全なる自由へのブリッジ上で私的な道筋を歩む人誰もが到達できるのです。

IV.III. サイエントロジーにおける黙示録の問題

L. ロン ハバードの個性、人生、著書により完全に、一度、黙示録がサイエントロジーに与えられています。したがって、教会員の任務は、ハバードのメッセージを学び、適用することです。ここに、ハバードの述べたことやテキストを継続的に参照する根拠があります。説教や宗教サービス、聖職者と教会参加者の日常の実践におけるハバードのテキストの機能と役割は黙示録の役割を果たします。

IV.IV. 口頭および非口頭による絶対者への理解

アポファティックな神学であるサイエントロジーにとって、絶対者についての非口頭による理解は特有のものです。絶対者についてのアポファティック神学的理解は、サイエントロジーの精神的伝統の正規の実践的特徴と結び付いており、絶対者について記述するのではなく、それに到達する方法について説明します。より高い意識状態への旅路は形式的には厳格であり、アポファティック神学において独特なものです。より高い意識状態を言葉で表現することが基本的には不可能だと前提することは、アポファティック神学においては典型的です。さらに、言葉は絶対者の体験を歪曲するのみだと見なされています。サイエントロジーはアポファティック的宗教体系の典型的な例のひとつです。

ミハイル A. シベルトセフ博士

モスクワ

1995年7月

ミハイル A. シベルトセフ

教育：経済学博士 (1973年)。1970年-1973年、科学院、雇用統計および国際労働運動研究所の統計学、経済学者。国際労働運動研究所、大学院。1959年-1965年、モスクワ航空研究所、経済学部。

職歴：1965年-1969年、プレнкаノヴ国立経済研究所、哲学部、下級研究員。1973年-1976年、ソビエト連邦科学学院、国際労働運動研究所、研究員。1976年-現在、アメリカ、カナダ、ロシアの科学研究所、上級研究員。

専門分野：政治社会学 (民族間および告解場間の相互作用に重点を置く)、政治的リーダーシップの統計学、文化の歴史と理論。

研究プロジェクト：1990年-現在、民族的告解認識における問題、アメリカおよびカナダ研究所、科学学院。1985年-1990年、政治的リーダーシップの型、アメリカおよびカナダ研究所。1980年-1985年、人道主義知識における歴史的かつ科学的な問題、アメリカおよびカナダ研究所。1976年-1980年、社会的進行過程における数理的型、アメリカとカナダの研究所のことです。1969年-1976年、雇用統計の比較分析、国際労働運動研究所。

野外研究プロジェクト：1991年-1992年、「東洋の村の描写」、ダグヘスタン。1989年、長寿に関するプログラム、アブカジア。

教育指導、講演：1991年-現在、ロシア国立博愛大学、社会学準教授、モスクワ。1992年-現在、モスクワ、ユダヤ教大学、ユダヤ人の離散についての政治学教授。

出版物/書籍：アメリカ合衆国と開発途上諸国との相互依存の統計、1988年。雇用統計の問題、統計学、1975年。

最近の論文：「ロシアの政治的文化と多党制の展望」アメリカ合衆国：経済、政治、イデオロギー、1993年、第1巻。「政治運動と政党：発端と展望」アメリカ合衆国：経済、政治、イデオロギー、1993年、第2巻。「教祖的リーダーシップ：政治的リーダーシップの問題」、1993年。「ダグヘスタン インタビュー」E. ラシュコフスキー共著、ロシアとイスラム教の世界、1993年、第1巻。「基礎科学が複数の中心を持つイメージを形成することに対する、伝統的な文化論文の

影響」理論と仮説における東洋、1992年。「ダグヘスタンにおけるイスラム」、ロシアとイスラム教の世界、1992年、第6巻。「ポール・チリッヒの宗教哲学における文化の結末」キリスト教徒、1991年、第3～4巻。

国際会議への参加：「外国人嫌い、人種差別、反ユダヤ主義」、モスクワ、1993年。「ユダヤ・キリスト教の対話」、ドイツ、アイゼンナック、1992年。「ヨーロッパ的思考と観念」、デンマーク、オルボー、1991年。

公共サービス：1990年-1993年、精神的対話におけるモスクワ提携、議長。1995年、ロシア大統領事務局の新興宗教組織協力委員会、議長に任命される。

